



紙は想いを載せるもの

北村 薫

写真の私が手にしているのは、叔母（宮本マシミ）が針と糸で綴じて作ってくれた「組み紙」の本。一九五五年九月九日と書かれているので、私が五歳の時のものになる。短冊になった折り紙を、切り込みの入ったもう一枚の折り紙に差し込んでいくと、いろいろな模様ができ、とても面白かった。こんなふうにして私が作ったものを台紙に貼り、束ねて本にしてくれたのである。叔母は自分で紙芝居を作ってくれたり、小さかった私とよく遊んでくれた。今でも紙が好きで、本に強い愛着を持っているのは、こうした温かい体験が記憶に残っているからだろう。

初めてホットキスを使ったときも嬉しかった。紙を綴じて、本にできるからだ。大学に入ってから同人誌を作るようになったが、ガリ版で刷った冊子の表紙選びも楽しかった。革模様の施された「レザック」や色の付いた「ミューズコットン」

など、東京の画材屋にはいろいろな紙があり、装丁を考える喜びも知った。

二月に拙著『いとま申して「童話」の人びと』を上梓した。その主人公は私の父である宮本演彦。「童話」は大正から昭和初期にかけて活発だった児童文学の雑誌で、金子みすゞが多くの作品を投稿していたことでも知られている。旧制中学から大学の予科に入学した頃の父にとっても、とても大きな位置を占める雑誌で、我が家には父の投稿作品が載った「童話」が二冊残されている。あの淀川長治さんも常連の一人で、叔母のマシミも投稿していた。

『いとま申して』は、残されていた父の日記をもとに書いたものだが、日記の一部を素材として使っているのが、父との共著という想いが強い。父が生前、日記を付けていたことは知っていた。亡くなったあと、二千ページ近くのものが遺されているのを目にして、このままでは消えていってしまうものだからこそ、何らかの形で残さなければいけないと思った。

私の読書量を上回る膨大な量の本を読み、映画を観て、創作の夢を追っていた当時の父の想いを知るとともに、後に『新諸国物語 笛吹童子』の作者として活躍する北村寿夫をはじめとする、私が知識として知っていた多くの人物との交流があったことを日記から知った。

時の流れが人を編み込んだ織物のよう



北村 薫(きたむら・かおる) ●1949年、埼玉県生まれ。早稲田大学文学部卒業。高校で教鞭を執りながら執筆を開始。89年、「空飛ぶ馬」でデビュー。91年、「夜の蟬」で日本推理作家協会賞、2006年、「ニッポン硬貨の謎」で本格ミステリ大賞、09年、「霧と雪」で直木賞を受賞。ミステリーの評論やアンソロジーの選者としても活躍している。

なものだとすれば、奇しくも同じ物書きとして、父をよく知る私が、その後を紡いでいくのは運命なのかもしれない。そんな想いが私の背中を強く押し、大きな時の流れとその中で翻弄されながらも力強く生きていく人々を描き出すことができたのではないかと思う。

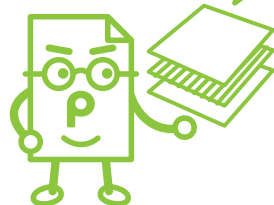
十五年以上をかけ、読み解いてきた日記のうち、本著で書き終えることができたのは、雑誌「葡萄園」を脱退した昭和四年頃まで。この後、父は文学の道を諦め、民俗学の道に進み、恩師折口信夫先生の薦めにより、沖縄県立農林学校の教師となる。当時の沖縄は民俗学の立場から見た時、すこぶる魅力的な研究対象で、父は民間伝承を収集することに大きな希望を見出した。

私にとって父の日記は単なる情報の記録ではない。紙があつて、父の手がじかに触れ、ペンを動かして記録されたもの。だからこそ紙に何か特別な感じを抱く。紙は決して無機的なものではなく、身近にあつて、ぬくもりや想いを載せるものなのだ。

ペーパー君のつぶやき 活動

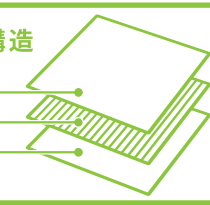
段ボールは、「3」がカギ。

1本ではもろい矢も、3本あわせれば強くなる。段ボールだってそうなんです。ライナと呼ばれる2枚のボール紙と、その間に入っている中しんと呼ばれる波形のボール紙。この3枚で支えあうことで、紙とは思えないほど頑丈に。なんと重さ1t以上のクルマを、段ボール4つで支えられるほどなんです。



段ボールの基本構造

- ボール紙 / ライナ
- 波形ボール紙 / 中しん
- 接着面



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつぶやき」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

◆今回は7月7日号、八塩圭子さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake